

『出会い』

ケルマディクの万神殿前広場は、参拝客目当ての商店が並んでいる。かなり広い広場だから、買い物客が足を休める宿屋や飲食店もある。

大きなパラソルを開いて、その下にテーブルと椅子を置き、飲食を楽しむ店もある。ケルマディクの治安がいいからできる商売だ。そのパラソルの下で一見して冒険者と解る男女三人がテーブルを囲んでいた。四人掛けの丸テーブルに席は四つ。一つは空席だが一杯の葡萄酒だけが置かれていた。他の三人の前には素朴だが量の多い料理が並んでいる。

三人の男女は神妙に手を組み、黙祷を捧げているようである。

不意に、左目に眼帯をつけた赤毛の娘が、少し芝居がかって祈りの言葉を捧げた。

「哀れあの世へ旅立った我らが仲間、カレン・ドゥルスの魂に祈りを捧げ、彼女の平安を祈ります。

私たちは貴女のおかげで生き延び、こうして今日の糧を得る事ができました。

その事に感謝しつつ、この祈りと食事を貴方に捧げます。

善き神々・・・に祈ったら貴女は困惑すると思っし、

ここにいるチビ僧侶は貴女に祈りを捧げるのがイヤだと抜かしやがるので、代表して私、イリネア・ルティスが祈ります。

安らかな眠りあれ。

では、いただきます！」

チビ僧侶と言われた小人系の童顔の僧侶は少し不機嫌な顔をしたが、最後の唱和には応じた。

そして、彼らの敬虔な態度もそこまでだった。

後は飢え死にしような狼も顔負けの食欲で、一心不乱に食べ始める。周りの客が呆れんばかりの勢だった。

「・・・イリネア、チビ僧侶はないだろ、チビは」

最初に一息ついたのは、体の大きさからいっても胃袋の小さい僧侶だった。小人といっても人間の半分ほどの身長である。だから椅子の上の一つ台を置き、そこに座れば飲み食いはい人前にできる。

その彼が文句を言った。

「チビにチビっていけないなら、クソ僧侶に訂正する。だいたい死者に祈るのは僧侶や神官の役割と相場が決まっているわ。私は弓矢を放つのが仕事よ。祈るのはあんたの専門でしょうが」

イリネアは葡萄酒で食べたものを流し込んで一息つくくと反論する。だが小さな僧侶は動じなかった。

「カレンが僕の神の祝福を受け付けるとは思えないね」

「同感」

今まで黙って食べていた魔術師のローブを着た青年が短く相槌を打つ。それにはイリネアも反論できない様子だった。

「・・・確かに、生き物を切り刻む事が彼女の喜びだったからねえ・・・あたしらの目の届かないところで、一体何人殺していたのやら・・・」

「善なる神々の神殿になんか寄り付きもしなかったし、まっ、僕の神は幸運の神だから、善とか悪とか気にしないけど、でも無辜の命を奪う者に祝福は与えられないねえ……」

「確かに良く殺したな。殺すだけ強かったけどな」

黒髪の魔術師の青年は少し遠い目をした。

「美人のエルフで、人殺し大好きで……なんでダークエルフじゃないのか不思議な女だったよなあ……」

「確かに強かった。でも竜には勝てなかったねえ」

小人の僧侶は葡萄酒を舐めながら呟く。

「竜に勝てないなら、意味がない」

イリネアはそう断定する。そして食事に戻る。魔術師と僧侶、種族は違っても男二人が顔を見合わせる。

「竜を殺すには重量級の戦士が必要だぜ。少なくとも、俺の呪文が完成するまでの時間を稼げるような、タフな奴じゃないと」

「カレンは強かったけど、エルフだからねえ……」

一般的にエルフは長命だが線の細い体つきをしている。だいたいにおいて美しい。耳はロバの耳に形が似ているけど。切れ味鋭い剣の腕を持っていたが、カレン・ドウルスは竜の攻撃に耐え切れなかった。

彼女が倒れた後、小人の僧侶と今席を外している盗賊上がりの青年が戦線を支え、イリネアが弓矢で竜の目を潰し、ようやく完成させた魔術師の呪文で葬り去ったのだ。

「竜を殺せばお宝が転がり込むが、殺すまでは一苦労だからなあ……」

「お宝の為に命を張るのは、幸運の神の教えに反しないよ」

「……幸運よ、あれ。が教えだっけな。ドウルワイト？」

「君も入信するかい、リュイシス？」

ドウルワイトと呼ばれた麦色髪の僧侶は、黒髪の魔術師リュイシスに尋ねる。

「魅力的だが、俺は知識と学問の力を信じているのでね」

「天運の前には我々の努力は小さいよ」

「努力しないものには神も微笑まないんじゃないのか？」

「確かに」

「とはいえ、イリネア。これからどうするんだよ。前衛のない冒険者パーティーなんてしまらないぜ」

リュイシスは二人の会話に乗ってこないイリネアを見る。彼女は空席の前に置かれた葡萄酒の杯を一瞥した。

「クレドネエが今斡旋所に行っている。目ぼしい奴を紹介してもらって声をかけるわ」

「竜を殺せる奴？」

リュイシスが確認する。イリネアは言うまでもないとうなづく。リュイシスは溜め息をついた。

「ほんと、お前竜殺しが好きだよな」

「倒せば儲かるでしょ。魔法の研究には金と時間が必要だ、ってあんたも言っていたし」

「まあな。でも竜にこだわる理由は、俺にはない」

こう言うてはなんだがリュイシスもドウルワイトも好青年である。

ドウルワイトは童顔を利用して人を誑かす事をするが、少々顔つきのキツイリュイシスは態度は角はあっても誠実な人柄だ。

二人ともこの一年ほど、何故かイリネアと一緒に行動している。左目の眼帯があっても彼女は美人だ。

長い赤毛は狩人には不向きなのではないかとも思うが、片目でも彼女は腕のいい弓手であり、仲間のリーダーである。それに不満はない。

ただ、あるとすれば彼女の竜に対するこだわりだろうか？

今回カレンが死んだ事についてもそうだ。カレンは人斬りであり賞金首とかを相手にするならば問題はなかった。だが竜の鱗はカレンの切れ味鋭い剣をたびたび弾いていた。そのせいで彼女は死んだともいえる。

もつとも、カレンの人殺し好きな、はた迷惑な性癖に皆辟易していたから、彼女の死を深刻に受け止めているものはいないのだが。

しかし仲間がこの話題を持ち出す度にイリネアは口を閉ざした。今回もリュイシスの言葉を聞き流している様子である。

リュイシスにしてもカレンが死んだ時は危ないと思ったが、なんとか生きて帰れたし、カレンの死のものにはあまり感慨がないので、今ここでイリネアを追及する気はなかった。

有体に言っただけでも彼女が好きだったからだ。

彼女の機嫌を損ね、パーティー全体を解散に追い込むつもりがないからだ。

気まずい空気が二人の間に流れ、ドウルワイトは少し困った顔をする。しかし彼はすぐに幸運の神に感謝した。幹旋所に行っていたクレドネエが戻ってきたからだ。

「よー、どうしたんだ。しけた面しちゃって」

「何でもない。それより、どうだった？」

イリネアは素早くクレドネエに応じる。話題と雰囲気を変える機会を逃したくなかったからだ。

クレドネエは褐色の髪が目立たない青年だ。目立たない事こそ彼の特技でもある。

しかし信仰心はおろか死者への敬意もない様子で、あっさりと空席に座り死者の為に用意された葡萄酒を飲み干してしまった。そして残っている料理に手をつける。

「まあ、待ちなつて。竜を殺して名をあげたい奴は大勢いるが、竜と戦って生き残った奴は少ないし、勝った奴は更に少ない。だいたいそんな奴は名が知れていて高いしな。それでこのクレドネエさんは別のところに目をつけた。とにかく頑丈が売りという奴を調べたのさ。」

竜を殺せなくても、竜に殺されないタフさがあれば、リュイシスの旦那が魔法を用意する時間が稼げるって寸法さ。それがこの一覽だ」

クレドネエの特技は目立たない事だったが、口を開けば良く回る。交渉事はドウルワイトと並んで彼の仕事でもあり、詐欺は彼の裏稼業でもあった。もともと詐欺業は喋りすぎで良く失敗すると本人も自覚しているようだが。

クレドネエが差し出した一覽を三人が覗き込む。彼は残り物を食べるのに専念し、給仕に追加注文をしている。腹の膨れた三人は検討を始めた。

「あ、こいつとこいつはダメだね。見掛け倒し、っていうか戦士というより芸人だね」

ドウルワイトが携帯している羽ペンで名前を二つ消す。

「こいつは昔組んだ事がある。商売長いけど逃げ足が速くて生き残っている奴だから、除外」

リュイシスがドウルワイトに指示する。

「という事は、見込みがあるのはこの三人か・・・って、この一番下の名前。『ポルメリア・ランキン』って『城砦落とし』じゃない。この街にいるの？」

イリネアは思わず声を上げた。

たった一人で城やら砦やら塔やらを攻略し、悪徳代官や残虐な魔法使い、情け容赦ない盗賊団を一人で壊滅、殲滅、皆殺ししているのが『城砦落とし』である。やたらと強いという噂は聞いている。そして皆で馬鹿にしている。何で一人で世直しみたいな真似をしているのか。手間がかかるし、その割りに儲かる仕事でもない。悪党を退治するけれども、だからといってその荒らされた土地が立ち直る面倒を見た事はない。

冒険者仲間の評価は『正義馬鹿』だった。

イリネアの問いにクレドネエはシチューをかき込みながら答える。

「ああ、武器を直しているらしい。アルドウルバルのおっさんのところに預けているようだな。定宿は万神殿内の孤児院・・・って目の前だな」

三人は顔を見合わせた。

「『人殺し好き』の次は『正義馬鹿』か。両極端だよなあ・・・」

リュイシスは気が乗らない顔をしている。

「彼女は善の軍神の使徒という噂だ。人間の姿をした天使の眷属とも言われている。味方にすれば頼もしいよね」

ドウルワイトは冷静だ。なんだかんだ言っても幸運ばかりでなく自分の客観的判断も重視しているようである。

だがイリネアは即答した。

「パス」

「なんで？」

ドウルワイトは不思議そうな顔をする。強さならば申し分ない。話をしてみる価値はある。だがイリネアは却下した。

「お堅い処女は話が合わない。教訓を垂れる奴にも用はない」

「ふーん……」

ドウルワイトは意味ありげにイリネアを見た。

「なによ」

「らしくない、とか思ってね」

「らしいって何よ？」

「いや、別に。なら残りは二人か。定宿にいるかな？手分けして行ってみようよ。

僕とリュイスは、このワーディスという人に会ってみるから、君とクレドネエはケインという人を当たってよ。んで、時間があったら『城砦落とし』に会ってみると」

「何こだわっているのよ」

「いや、天使の眷属には、神の下僕としては一度会ってみたいと思ってね」

ドウルワイトの言葉にイリネアは不満そうだったが、しかし結局は承知する事にした。

先に名前を上げた二人と話をつければ、『城砦落とし』に会わなくても済む。そう思ったからかも知れない。

「……じゃあ、終わったらもう一度この店で落ち合いましょう。クレドネエ、早く食べてよね」

「熱々のシチューを急いで食べたら、舌が火傷しちゃうぜ」

「ドウルに治してもらえば？」

「いや、僕らが行くところは遠いからお先に失礼するよ。『幸運よ、あれ』」

ドウルワイトはにっこりと笑い、リュイスはやや不満そうな顔で席を立った。

本当のところ、リュイスはイリネアと一緒に行動したかったのだが、彼と彼女ではやや交渉力が低い。

今の組み合わせが合理的ではある。だから何も言わずに行ってしまった。

「舌を火傷すると、口が良く動かなくなつて、まとまるものもまとまらなくなるぞ」

クレドネエは文句を言い続けたが、イリネアが腹立たしい様子で自分を見ているので、それ以上言葉を続ける事はできなかった。

溜め息をついたイリネアは隻眼の明るい碧の瞳を扉に囲まれた巨大な万神殿に向ける。

善なる神々を中心に、多くの神々を祀る巨大伽藍。だが彼女にとってそこは虚飾の巢窟でしかなかった。

「……できれば、行きたくないわね」

クレドネエの脳天気な問いに、イリネアの拳が唸った。

ポルメリアはいつも小鳥のさえずりで目を覚ます。夜が明けきらぬ頃から歌いだす小鳥たちの声で朝が近い事を知る。

ベッドで休まないのはいつもの事だ。旅で使っている寝袋やマントを巻いてベッドの上に置き、その上にシーツをかける。本人はそこから離れた場所で剣を抱き、毛布に身を包んでまどろむようにして夜を過ごす。

人の姿をしながら、彼女は人ではない。善なる軍神の加護と支配を受け入れ、生きながらにしてその軍勢の一員となるべく定められた彼女は、人間の姿をした天使といえた。

疲れそのものは眠る事なく回復する。まどろむ程度で十分だった。

ベッドで休まないのは、それとは関係ない。命を奪い狙われる戦士の宿業である。

ケルマデイクの万神殿に悪意をもって侵入する者はまずいないのだが、彼女はこうやって十五年間生きてきた。物心つく前から剣を取り、剣に親しんで生きてきたのだ。

例え愛用の物でなくても、手元に剣を持ち、全てを警戒して休息する事が悲しい習いとなっていた。

目が覚めるとやる事は、ベッドの上で休んでいたようにつくろふ事だ。

孤児院を主催している豊饒の女神や竈の女神の女祭司たちは、ポルメリアが心から休めるように計らってくれている。その心遣いを裏切る事はできない。このベッドで安心して眠れたと装わなければならない。

それが終わると鍛錬を始める。外に出て剣を振る。一分の狂いもなく、何度も何度も同じ所作を、些かの揺るぎもなく繰り返す。

その緊張感で周囲にいた筈の小鳥たちは皆逃げてしまう。

朝日が顔を出す頃、朝食の仕度ができたと当番の若い女祭司がやってくる。若いといっても皆ポルメリアよりは年上だ。豊饒の女神に仕える本職の神官は神殿での儀式を司っている。

孤児院の運営や奉仕活動は良家の女達の有志によって支えられている。

この娘も花嫁修業の一環として孤児院の世話をしているのだろう。

ポルメリアに接する祭司たちは、皆決まって頬を赤らめている。彼女にはその理由が解らない。

祭司長から、男装の麗人というものに皆興味津津なのだ、と聞かされても良く解らなかつた。

朝食は孤児たちも祭司たちも、もちろんポルメリアも同じ物を食べる。質素だが栄養価の高いものばかりだ。

育ち盛りの子供たちにまず必要なのは、お腹一杯食べられる食事なのだから。

午前中は子供たちも勉強の時間になる。年齢に応じて別々の事を教えられる。読み書きや計算、あとは神話のお話がされる程度だ。

その間にポルメリアは髪を梳く。美しい蜂蜜色の金髪は、彼女の数少ない女らしい自慢の一つだ。

長くて戦うときには邪魔になりがちなのだが、それを利用して戦う事も覚えた。丹念に丁寧に、一櫛、一櫛つつ梳いていく。

昔から黄金の滝のようだと言われてきた。その事が素直に嬉しい。

髪を梳き、一本の三つ編みに編み上げると善なる軍神の神殿を礼拝する。そこは彼女の支配者、彼女の指揮官が祭られている場所だ。彼女はいつもそこで期待する。自分がとるべき道を、何かしら啓示されるのではないかと。

だが願いは虚しく、神の声が届く事はない。私はまだ神から直接使命を命じられるような存在ではないのだ。

その軽い失望を抱えながら、軍神の神官たちと言葉を交わす。

『天使王国』に満ちた悪行をやめぬ支配者、盗賊、魔法使い、邪神の僕、そういった者たちの情報を得る為だ。

しかし気をつけなければならないのは、対立する諸侯の宣伝に誤魔化されない事だ。

今の『天使王国』は争いを阻止する強力な権力が存在しない。

かつて天使たちが公平な裁きと強力な魔法の力で権力を司った王国は、最後に目撃された天使が百年ほど前に姿を消して以来、徐々に徐々に混乱した世界に変わりつつある。

誰もが敵対者をあらゆる手段に訴えて排除しようとする世界だ。

噂されるものが本当の悪であるか確認しなければ、酷い間違いを犯す恐れもある。

神官たちと話し、それを元に資料を得る為、知識と学問の神の神殿に向かう。午前中は調べもので潰れる。

目星をつけた相手に対して、街の酒場や宿屋でならもつと詳しい話も聞ける。それは旅立つてからでもできる事だ。

昼になって、再び孤児院で食事を取ると、午後からは子供たちがポルメリアを取り合う。

彼女と遊んでもらおうと皆彼女の気を引こうとするのだ。

こうなると元来子供好き・・・というか遊ぶ為の大義名分を得たようなのだが、

ポルメリアの顔は一瞬にして戦士のそれではなく、年頃の、いやそれよりも幼い少女の顔になって子供たちと一緒に遊ぶのだ。

その日は子供たちの中で最年長の少年デイエスが歌を聞いてくれと頼んできた。彼は来年十二になる。

何かの職につかなければならない。普通は職人の徒弟となるか、農家の養子になって働きに出るのだがデイエスは歌が上手い。芸能神の神殿にやってくる芸人や吟遊詩人たちに教えを請い、近くその一人を師匠と仰ぎ旅に出る予定なのだ。

「ポリーに僕の歌を聞いてもらおうと思って・・・」

デイエスは褐色の髪を掻きながら、はにかみながらそう言った。皆もデイエスの歌が好きなようだ。

ポルメリアの取り合いは今日はなかった。皆が円陣になって座り、その中央でデイエスがリユートを奏でて歌う。

それは子供にはやや難しい武勲の歌だった。遠い昔、まだ天使たちが王国を治めていた頃に戦われた、天使の軍勢と地獄の火竜との壮絶な戦い。

『エンペランス騎行』と名づけられたそれは、最下級天使のエンペランスが天馬の騎士として成長し、ついに地獄の火竜との対一の戦いを勝ち抜くまでの物語だ。

しかしこの物語には異説がありエンペランスは火竜と相打ちになったとか、倒す事はできず弱らせただけで自身も重傷を負い、天界に召されたとか色々々々ある。

驚いた事にデイエスはそのどれも歌わなかった。それはエンペランスの悲壮な戦いの歌だった。

味方を失い、愛馬を失い、それでも戦い続けるエンペランス。最後は矢つき剣折れ、火竜の炎に巻かれて死ぬ。

その悲しい結末に子供たちは泣き始めた。けれども拍手はやまなかった。

それは戦いの歌ではなく憎悪の歌でもなく、死を免れぬエンペランスの運命と、

それを知っても尚も剣を取り戦う彼の勇壮な悲哀に満ちた歌だった。

それが話を理解しないまでも子供たちの心の琴線に触れたようだった。

ポルメリアの深い青い瞳からも涙が一筋流れた。

しかし、どうしてだろうか。彼女にはエンペランスの運命が他人事に思えなかった。

「この歌を教えてもらった時に、何故かな、ポリーの姿が思い浮かんだんだ。どうしてだろう・・・？」

「・・・そうだね。どうしてだろうね・・・」

だが彼女には解っていた。彼女はたった一人で戦いの人生を歩んできた。剣の師匠さえも我が手で殺した。エンペランスにはいた愛馬もない。

私はこのまま、たった一人で『悪』と戦い、そして死んでいくのだろう・・・

それが彼女の定めだった。それが彼女の人生なのだ。

しかし、今はそれを忘れよう。今の彼女は子供たちの『ポリー』なのだから。

涙の後に自分の事を誰よりも忘れたかったポルメリアが、立ち直った男の子たちと球蹴りをしようと言い出す。体を動かせば子供たちは嫌な事を忘れる。それを見ていた女の子たちも笑い出す。

無邪気な時間が戻り、このまま日没前の鐘が鳴るまで走り駆けようと思っていた。

その時、女祭司長に連れられて何人かの部外者がこちらにやってくる気配を感じた。瞬間、彼女の空気が変わった。一緒に笑い転げていた子供たちの顔も固まり、賑やかな雰囲気は峻厳で清冽な空気に塗り替えられた。

「あんたが『城砦落とし』？」

声は若い女だった。しかし関係ない。振り向いた彼女の瞳には全ての『悪』を射抜く清冽な光が宿っていた。

「そうですが、なにか」

振り返った彼女を見て、来訪者たちもたじろいでいた。それが彼女。全ての『悪』を打ち倒す為に生まれた者。

彼女の名はポルメリア・ランキン。

またの名を『城砦落とし』。

畏怖と嘲笑に塗れて。

☆

「・・・悪い予感は当たるもんだな」

リュイシスは溜め息をついた。

「そうかな？別に悪いとは思えないけど」

ドウルワイトは何も問題にしていな様子だ。

「まっ、妥当な線じゃねーの？噂を聞く限りじゃ『城砦落とし』はべらぼうな戦士だ。

融通が効かないとか、馬鹿正直とかって話も聞くけど、だからこそ扱い易いんじゃないかな？」

クレドネエはお気楽な顔をしている。

「・・・だといんだけどね」

イリネアは思いつ切り気が進まないという顔をしていた。

彼らが手分けして当たった二人の戦士との交渉は、どれも芳しくなかった。

ドウルワイトとリュイシスが向かったケインという戦士は、遠い南方へ旅に出でしまっているらしい。

帰還の予定は立っていないとのこと。イリネアとクレドネエが当たったワーデイスは、実は人狼であつたらしく、つい先日、旅先で善なる軍神の神官たちに倒されてしまった、という。

こうなれば残つたのは『城砦落とし』ポルメリア・ランキンしかない。

なんとしても前衛戦士を確保しなければならぬ彼らである。とりあえず当たってみる他ない。

万神殿の門を潜り、豊饒の女神の神殿を訪ねる。竈の女神の神殿と孤児院はそこにあるようなものだ。

『城砦落とし』を訪ねると、応待した祭司長が子供達の相手をしていると教えてくれる。そこは川原の草原だった。

男の子たちと球蹴りに興じている、美しい金髪の三つ編みを振り乱している小柄な少女が一人いた。

遠目に見たそれは余りにも無邪気で、とてもではないがたつた一人で城を落とすと言われる無双の騎士には見えない。

だが彼らが無造作に近付くと一瞬にして空気が変わった。一緒に遊んでいた子供たちの顔が強張る。

『城砦落とし』は彼らの方を向いていない。にも関わらず、部外者である彼らに警戒心も露な臨戦態勢を取っているのだ。

一瞬イリネアは弓を仕舞っている事を後悔した。しかし相手も武装していないし、何も殺し合いをしにここに来た訳ではない。だが、こんな娘を説得するなんて骨の折れる話だ。気分の乗らないイリネアの声はぶつきらぼうだった。

「あんたが『城砦落とし』？」

振り向く勢いはしなくなった鞭を思わせた。三つ編みが金色の鞭のようだ。彼女は清冽で峻厳で、息を飲むほどに神々しく美しかった。だが青い瞳は暗く深く、全てを見通そうというように鋭い。

「そうですが、なにか」

「あんたとちょっと話をしたいんだけど・・・あっちへ行かない？」

イリネアが指さしたのは土手の中ほどに生えている樹木だった。調度良い木陰ができている。

「話ならいつでもできると思いますが」

ポルメリアは彼らに対する警戒を解かない。祭司長が連れてきたといっても、彼女は大店の妻女だ。本職の神官ではない。

そんな彼女に、イリネアは呆れたもんだと溜め息をついた。

「私達はここで話してもいいけど、後の子供たち、怯えているじゃない。てんぱり過ぎよ」

言われたポルメリアは初めて気がつき、不安そうに後ろの子供たちを見た。

男の子も女の子も、皆一様に何か別の者であるかのようにポルメリアを見ている。彼女は慌ててつくろうしかなかった。

「皆、ごめん。ちょっと私、この人たちとお話しなくちゃならなくなって・・・また後で遊ぼうね」

その言葉に子供たちは解き放たれたように反応した。誰もが慌ててうなずき、怯えた表情のまま祭司長の方へと走り出した。

ポルメリアは悲しそうにそれを見送る。イリネアは、頭を掻きながら一部始終を見ていた。だがその事には何も言わない。祭司長が氣を利かせて子供達を遠くへ連れて行くのを見届けて、再び木陰へと誘った。悲しみと思いつめたような苦悶の表情を浮かべて、ポルメリアはイリネアに従った。

「・・・あんたみたいな、一人でやっている人には興味ない話かも知れないけど・・・」

イリネアの仲間たちは思い思いに腰を降ろす。皆でポルメリアを囲んでいるような形になっている。だが話し始めてイリネアは気づいた。落ち込みはしたがポルメリアは臨戦態勢を解いていない。その気になれば四人をまとめて無力化できる位置にいる。

イリネアは何度目かの溜め息をついた。

「身構えるのも解るけど、別にあんたや子供たちや神殿をどうこうする気なんかないから。いい加減その目はやめてくれないかな」

「目・・・とは？」

「善の軍神の使徒は一睨みで悪意を持った者を見分けるといいますね。それがどうにも敵意に満ちた顔に見えて・・・」

小柄な、というよりもイリネアの半分ほどの体つきしかないドウルホワイトが、その童顔に苦笑を浮かべて指摘する。しかし、だからといってポルメリアが恐縮した訳ではなかった。

「それは申し訳ありません。しかし、私はあなた方の事を何も知らない。無礼だと思いいなるなら、まず名乗られてはいかがですか？」

「それはごもっとも。いや、最初からそうするべきだよな。俺の名前はクレドネエ。

仲間の交渉役さ。最初から俺に任せてくれれば、こんなギスギスした事にはならなかったと思うけど、このお姉さんが聞かなくて・・・」

クレドネエが陽気に喋りだす。それに対してイリネアの返事は冷たかった。

「あんたが喋りしたら、時間ばかりかかって仕方がない。まあ、名乗らなかつたのは謝る。

私はイリネア。イリネア・ルティス。狩人をしている。眼帯をしているのは勘弁して。昔左目を潰されたの。あつ、気の毒そうな顔しないで。これでも不自由はしていない。で、そっちが・・・」

「ドウルホワイト・オスメル。幸運の神を信じ仕える者です。善なる軍神の生ける使徒とお話できるなんて、光栄ですよ」

小さなドウルホワイトは立ち上がっても座った人の座高ほどしか背がない。しかし優雅なお辞儀をしてみた。

最後のリュイシスはぶつきらぼうだ。

「リュイシス・ケダル。魔術師だ」

「以上がイリネアと愉快的仲間たちの面々ってわけだね」

クレドネエは笑いを取ろうとそう言ったが、ポルメリアの反応は悪い。冷たい顔で言い返すばかりだ。

「その方達が私に一体何の御用で？」

だがイリネアは、その問いに直接答えようとはしなかった。

「私達は竜を専門に倒している。つまり竜殺しの専門家というわけ」

「わー」

「ところが、見て解るでしょ。先頭に立って戦う戦士がいない」

「この間、竜に八つ裂きにされちゃってね。ああ、カレン。いい女だったのに！」

「クレドネエ、ちょっと黙って。・・・でもそれは本当。私達には今、竜と身を持って戦ってくれる仲間がいないの。あんたの評判は知っている。悪い奴と戦うのが生き甲斐って、あんたの趣味も・・・」

趣味と言われてポルメリアの形のいい眉がややひそめられた。ささやかな不快感表明だったがイリネアは無視する事にした。

「私達は人々を困らせる竜を退治している。あんたの力を借りたい」

クレドネエとドウルワイトは興味津々という顔でポルメリアの返事を待っている。リュイシスは感心がないと言いたげだ。そして言葉とは裏腹にイリネアも熱心に頼んでいると言いつつ難かった。なるべく早口で用件を済ませようとしている。ポルメリアの返事を早くもらい、すぐに次の事をやりたいという感情が見え隠れしている。

ポルメリアの青い瞳は順番に、そんな彼らを見て回った。そして一巡した後、溜め息を漏らす。

「・・・私にどんな返事を期待しているのです？」

「できれば僕たちの仲間として旅をしてもらいたいと思うんですけど」

童顔のドウルワイトがにっこりと人誑しの微笑みを浮かべる。それに対してポルメリアは当惑した表情になった。

「私には人々を苦しめる悪き支配者を滅ぼす役目があります。とてもあなた方のご期待には沿えません」

リュイシスとイリネアは想像通りの答えだと知って、それぞれ失笑と溜め息を漏らした。

このクソ真面目な娘が神から下された使命を放り出す筈がないと解っていた。そう言いたげだ。

しかしドウルワイトとクレドネエは諦めなかった。ドウルワイトは微笑みを崩さずに言葉を続ける。

『悪』を滅ぼす事が貴女の役割なのではありませんか？僕たちも、人々を苦しめる竜を滅ぼしています。問題ないじゃありませんか？」

「竜は気まぐれに人々を襲う。しかし、悪き支配者は人々から日常的に略奪しているのです。財産を、家族を、そして命そのものを。私には同列に論ずる事はできません」

「・・・でもさあ、君、自分の評判知らないだろ？」

ここでクレドネエは悪戯っぽく笑いながら切り出した。

他人からどう思われるかは、気にならないと言えば嘘になるが重要な問題ではない。

どう言われるか、ではなく、何をしたか、が彼女の判断基準なのだ。ポルメリアはクレドネエを無視した。

しかしクレドネエは言葉が続ける。

「皆言っているぜ、『正義馬鹿』。あるいは『歩く迷惑』」

彼の言葉を聞いて流石にポルメリアの顔色が厳しくなる。何も言わなかったがクレドネエを睨む。しかしドウルワイトは勿論の事、イリネアやリュイシスまでも彼の言い草には驚いた。とてもではないが勧誘する者の言葉ではないからだ。

クレドネエの言葉は間違いではない。ポルメリアに感謝する者もいるが、大概ははた迷惑だと思っている事も事実だ。だがそれは彼女にとっては心外な事だった。

「迷惑・・・？」

「そう。迷惑なんだってさ」

「どうしてそんな・・・」

「例えばこの間、君は自分の元師匠を殺した。城にいたオークもホブゴブリンの兵士も、何もかも一切合財殺した。確かに、ランズベール卿は抑圧者で悪党だったさ。だが地域の支配者だった。その彼と彼の軍勢がいなくなるとどうなるか？

重税を課していた暴君はいなくなった。バンザイ！だがその後どうなるか？君は何の手も打たずに去ってしまった。残された人々には、ランズベールの後釜に座ろうと様々な奴が襲い掛かってきた。

山賊、盗賊騎士、ならず者。今までランズベールがいたから、その土地に手を出せなかった連中が、ごろごろとやってきた。人々はどうすればいい？」

陽気なクレドネエの問いに、リュイシスが陰気に答えた。

「どうにもできないさ。迎え撃つ手段も力も、彼らにはない。

今までランズベールに生かさず殺さず奪われてきたものが、今度は根こそぎ奪われ、下手をすれば殺される事態になった。

つまり、それが、どっかの誰かさんが『善意』でやった事の結果、という訳だ」

「それはどういう・・・」

ポルメリアが要領を得ないと首を傾げる。そこで苛立つイリネアが断言した。

「ランズベールの方がマシだったって事。少なくとも奴は自分の領民を根こそぎ殺す事はしなかった。

だが流れ者の盗賊なら、面白半分で村を襲い、奪い尽くし、殺し尽くす。結局、あんたが『善意』でやった事は、裏目に出たって例」
「・・・そんな・・・な・・・」

さすがのポルメリアも表情が崩れた。彼女の脳裏にランズベールの恨みがましい声が蘇る。それが酷く耳に障った。

自分が善き事と確信して行った事は、実は人々の苦しみを増す事でしかなかった、だなんて！

力なく肩を落とすポルメリアを眺めて、イリネアとリュイシスは顔を見合す。だが二人とも肩をすくめただけだった。

ドウルワイトはやや思案顔だ。言い過ぎだ、と他の者に合図するが誰も見ていない。

イリネアとリュイシスは無視した様子だが、クレドネエは違った。彼はポルメリアを非難して話を終える気ではなかったのだ。

「でも、俺たちなら、そんな悲しい行き違いは起こさない。皆が望まない事はしない。誰もがいなくなつて欲しい、この世から消えて欲しいと願う竜だけを倒すんだ。なつ、合理的だろ？これなら文句を言う奴は・・・いない事はないが、まあ大した問題じゃなくなる。君の、その正義の力を役立てるにはうつつけだと思わないかい？」

リュイシスは内心、クレドネエの論法に舌を巻いた。こういう真つ正直に世の中の役に立ちたがっている人間をその気にさせるには、それまでやってきた事を一端否定してみせて、それでも彼女には取るべき道があると教えてやれば、心の弱い者ならそれに乗ってくる、という寸法なのだ。

流石に詐欺のような交渉が得意なだけはある。

だが、『城砦落とし』は年若き娘であっても、心の弱い人間ではなかった。落ち込みながらも、クレドネエの言葉をちゃんと冷静に聞いている。

「人々が消えて欲しいと願う・・・その意思表示はなんですか？」

「え、意思表示の方法？えっと、そつ、それは・・・ですね？」

言われてクレドネエは反射的に答えを返そうとしたが、余りにも露骨な表現しか思い浮かばなかったらしく言葉に詰まってしまった。

肩を落としていた筈のボルメリアの瞳に、急速に光が戻ってくる。答えられないクレドネエを睨み始める。

しどろもどろになったクレドネエに代わって答えたのはイリネアだった。それも、誤魔化さずはつきりと言った。

「金よ、金。当たり前でしょ？」

「賞金稼ぎ、ですか」

ボルメリアの青い瞳が細くなる。やや軽蔑の色が見える。イリネアは舌打ちした。

「言っておくけど、私達は値上げ交渉をした事はない。

本気で、切実に相手を消したがっているなら、そういう態度を見せてもらわなければダメなの。

そういう人たちじゃないと、竜を殺した後の事までは考えられない。

それに、私達は慈善事業をしている訳じゃない。あんたみたいに、いい事して自己満足している訳でもない」

「自己満足ではありません！」

ボルメリアの青い瞳が炎のように燃え上がった。だがイリネアの深い碧の瞳は冷えたままだ。

「自分の判断で人を殺して城を落として、その後の事は知らない、さようならつてのが、自己満足じゃないと？」

言われてボルメリアは再び肩を落とした。それは否定できない事実だった。それにリュイシスが追い討ちをかける。

『地獄の街の敷石には、善意、善意と彫られてる』

「なんですか、それ？」

ドウルワイトの間に、リュイシスは皮肉な笑いを浮かべた。

「どんなに悪い結果でも、始められたそもそもの動機は『善意』だった。って諺さ」

「・・・女の子を苛めて何が楽しいんですか」

そのドウルワイトの言葉には返事をせず、リュイシスは冷笑するばかりだった。

「僕たちは頼りになる、竜と戦う事のできる戦士を求めにきた筈ですよ。違いますか？」

「違わない」

そう言いながらイリネアは明後日の方向を向いている。日頃愛想のいいドウルワイトがイリネアを睨む。その事に気づいて彼女は溜め息をついた。

「解ったわ。言い過ぎた事は謝る。できれば、あんたには私達の仲間になってもらいたい。

クレドネエが言うとおり、あんたにとってもこれから間違いを起こさない為には、いい事じゃないかと思うわけよ」

イリネアはドウルワイトの視線に促されてポルメリアを渋々ながら説得し始めた。

「間違い・・・」

ポルメリアは解らないというように眉をひそめる。

「助けたつもりが、旧ランズベール領の領民を混乱に叩き込んだ。そういう様な事よ」

言われてポルメリアは、かっと顔を赤らめた。怒りと羞恥がないまぜになった顔の火照りだった。

だが怒りはイリネアたちに向けられたものではなかった。自分の無神経さに腹を立てた様子だった。

「人々を苦しめる竜を倒す・・・それがあなた方の仕事なのですね」

「そして、報酬と竜のお宝をいただく！」

クレドネエは嬉しそうに言ってからイリネアに睨まれて口をつぐんだ。

確かに重大な時だった。ポルメリアは迷っているのだ。自分達に不利になる発言は控えるべきだった。

しかし、ポルメリアの耳にクレドネエの言葉は入っていなかった。

自分のしてきた事が人々の為になるとは思えど、人々の害になるなどと考えも及ばなかった。

自分が今、こうして情報を集めてきた倒すべき『悪逆の領主』たちとて、考えてみればそれはそれとして世界の『秩序』なのである。彼らを倒すからにはとって代わる『秩序』が必要だった。具体的には倒した領主に代わる良心的な支配者を用意しなければならない。

だが、それは今の彼女には無理な話だ。物心ついた頃には、もうランキン侯爵の騎士団にいた彼女である。

善なる軍神の兵士たるべく剣撃を鍛える毎日であり、侯爵令嬢であっても支配者たる『帝王学』など学んだ事はない。

それでは別の人物を支配者としてすえるか？

それも無理だ。戦う事しか学ばず、今も戦いの日々にある彼女には人脈がない。良き支配者となれる良心的な貴族や騎士に心当たりなどない。

結局のところ彼女は『壊し屋』だった。敵を撃ちすえ撃ち滅ぼす事しか知らないのだ。何かを作り出す事など彼女は知らない。ひたすら殺す事と壊す事だけが彼女のできる全てなのだから。

今更のようにポルメリアは自分自身を呪った。これでは、破壊衝動で全てを滅ぼす最悪の魔神と同じではないか！

難しい顔で黙り込んでしまったポルメリアを囲んで、イリネアたちはしばし沈黙を守った。

ドウルワイトやクレドネエは彼女が仲間に加わればいいと思っている。

天使やその眷属への好奇心からドウルワイトはそう望み、報酬への拒絶反応から察して彼女は金に淡泊だとみたクレドネエは、欲深い他の戦士よりも彼女が仲間に入れば分け前が増えると思っている。

リュイシスは、できればこないで欲しかった。ポルメリアがどうこうというよりも、その性格が合わないと思ったのだ。彼は魔術師である。信じるよりも疑い考え調べる質だ。

盲目的に神に従う連中を苦手と感じ、できれば関わりになりたくないと思っている。

ドウルワイトと付き合っているのは、彼が盲目的でなく人事を尽くして天運を待つ考え方だからだ。待つについても幸運はやってこない。それは彼の考え方でもある。

とにかく『善』の神の為に『悪』と何の考えもなしに対決する人間など、楽しみみの為に人を殺していたカレンと同じにしか見えなかった。『善』の使徒は、良い事だといって『悪』を殺戮するのだから。

そしてイリネアは、実のところ迷っていた。

押し付けがましい『善』など不要だと思っているのは彼女も同じだったが、

しかし頭からポルメリアに関わりたくないと思っているリュイシスと違い、

彼女には黙って考え込んでいるポルメリアが好ましく思えた。

少なくともポルメリアは頑迷な『善』ではない。間違いを指摘されれば恥、受け入れ、苦悩する。

クレドネエの言葉が本当かどうか、今この時では確認しようがない。

だがポルメリアは素直にそれを受け取り、悩んでいる。それが可愛らしかった。

彼女は素直で優しい少女なのだ。子供たちに好かれてもいたし、不意の来訪者である自分達に警戒するのは当然だ。

ただ責任感が強すぎて子供が怯える事にも気づかず身構えてしまった。

その時は不愉快に感じたが、確かに評判どおり愚かに見えるほど誠実なのだといリネアは感じた。

一緒に旅をしても構わないと思う。

だが是非に、とは思わなかった。そう思うには余りにも出会いと別れを彼女は経験し過ぎていた。

イリネアは実年齢よりも遥かに大人びていた。

ポルメリアの沈黙は長かった。日が傾き、黄昏の気配がやってくる。そろそろ夕食の心配をしなければならない時間だ。

イリネアたちも宿に戻らなければならない時間である。

ドウルワイトとクレドネエはイリネアを顧みた。リュイシスは相変わらずそっぽを向いている。イリネアは溜め息をついた。

「……まあ、ゆっくり考えて。もう二三日はケルマディクに滞在する予定だから。返事は街道沿いの……なんて店だっけ？」

立ち上がったイリネアは宿の名前を思い出そうと首を捻る。

その時、不意にポルメリアが立ち上がり正面からイリネアの碧眼を覗き込んだ。隻眼のイリネアは身動きせず、彼女を見返した。

「あなた方と一緒に旅をしたいと思います。・・・私はまだまだ未熟者です。

人の為に良かれと思った事が裏目に出るなんて、考えもしなかった。

あなた方なら、それを避ける方法を私に教えてくれるのではありませんか？」

青い瞳は何処までも真っ直ぐだった。その純粹さがイリネアは嫌いではなかった。

これが天使の眷属というものなのだろうかと妙に納得した。

「・・・私は人に教えるのは苦手。だから学びなさい。出発はあなたの武器が仕上がるのを待つ。報酬は五分分。いいわね？」

言った後に微笑もうとしたイリネアだったが、それを遮ったのはポルメリアだった。

「報酬はいりません。人助けしてお金をもらおうなど・・・痛っ」

ポルメリアの言葉は青筋立てて彼女の頬を抓ったイリネアに阻まれた。そして彼女は本気で腹を立てた。

「労働には報酬はつきもの！私は仲間になんか働かさざるつもりはないよ。

報酬は、褒賞金も竜のお宝も、きっかり五分分よ！嫌だといつても受け取らせるからね」

呆気にとられながら頬を撫でるポルメリアに、イリネアは背を向ける。

ドウルワイトは優しく笑いかけ、クレドネエはイリネアに文句を言いつつ、

そしてリュイシスは失望の溜め息をついて彼女に従った。

ポルメリアに解っていること。それは、このままでは自分はダメなのだという事実だった。

自分もつと人々の為にできる事を学ばなければならぬ。

私はただの剣だった。だがそれだけではいけないのだ。剣は剣。敵も味方も等しく傷付ける存在。

私は剣を操る者にならなければならないのだ。良かれと思って成した自分の行為に、涙する人を出さないために。

彼女はそう思った。

数日後の朝、アルドウルバルから剣と盾を受け取ったポルメリアは新しい仲間と共に旅立とうとしていた。

見送るのは祭司長を始めとする大人たちばかりだ。その事が少し寂しかったが仕方ない。

彼女が無分別に警戒心を露にしてみましたから、子供たちは、年長の男の子たちさえ怯えてしまった。

こういうところが『歩く迷惑』と言われる原因なのかも知れないと、密かに自嘲した。

祭司たちに子供たちの事は気にしないで、と言われても無理だった。

「それでは、お世話になりました。ケルマディクに参る時は、またご厄介になりますが、その時はよろしくお願いします」

マントを羽織った旅装姿のポルメリアは丁寧な頭を下げたが祭司長は苦笑した。

「そんな挨拶は受けられません」

「はっ」

「私達は貴女を家族だと思っています。ここは貴女が帰ってくるべき『家』なのですから、私達はこういうだけです。

祭司長の言葉を聞いたポルメリアは嬉しそうに少し頬を染めた。そして年頃の娘に相応しい微笑みを浮かべた。

「あ……はい。いってきます」

イリネアたちは一足早く城門のところへ向かっている筈だ。近道とばかりに万神殿の塀沿いの道を歩く。その時、塀の上で気配を感じた。振り返ったポルメリアが目にしたものは、デイエスを始めとする子供たちの姿だった。せーのっ、と声を揃えた彼らは、大きな声を朝のケルマデイクに響かせた。

「いつてらっしやい、ポリー。また遊んでねー」

皆盛んに手を振っている。小さな女の子たちも年長の子に抱きかかえられて塀の上に顔を出している。皆笑っていた。笑っている……良かった。ポルメリアは顔をほころばせ手を振り返した。

子供たちの歓声が上がる。もう一度大きく手を振った彼女は、暖かな気持ちに包まれて道を急いだ。

大丈夫。私は変わる。変わらなければ。あの子たちが生きていく、この世界の為にも。

夜明けと同時に開かれた門は、ケルマデイク市内に入る人や物でごった返していた。その中で新しい四人の仲間がポルメリアを待っていた。

「お待ちせしました。さあ、参りましょうか」

いつも一人だった彼女がこんな事を言うのは初めてだ。それだけでも何かが変わる気がする。そんな期待と不安が入り混じっていた。

リュイシスは無愛想だった。クレドネエとドウルワイトは仕方ないと顔を見合わせて肩をすくめる。そしてイリネアは揃った仲間と言った。

「次の獲物は地下迷宮の黒竜よ。依頼主はディスレン侯。久々の大仕事だから気合い入れていくよ」

それぞれがそれぞれに返事をする。朝日が昇る雑踏の中、五人の仲間は旅立っていった。

竜を殺す旅路に。

「それでは、お世話になりました。ケルマデイクに参る時は、またご厄介になりますが、その時はよろしくお願いします」
マントを羽織った旅装姿のポルメリアは丁寧な頭を下げたが祭司長は苦笑した。

「そんな挨拶は受けられません」

「はっ」

「私達は貴女を家族だと思っています。ここは貴女が帰ってくるべき『家』なのですから、私達はこういっただけです。

祭司長の言葉を聞いたポルメリアは嬉しそうに少し頬を染めた。そして年頃の娘に相応しい微笑みを浮かべた。

「あ……はい。いつてきます」

イリネアたちは一足早く城門のところへ向かっている筈だ。近道とばかりに万神殿の塀沿いの道を歩く。その時、塀の上で気配を感じた。振り返ったポルメリアが目にしたものは、デイエスを始めとする子供たちの姿だった。せーのっ、と声を揃えた彼らは、大きな声を朝のケルマディクに響かせた。

「いつてちっしゅい、ポリー。また遊んでね！」

皆盛んに手を振っている。小さな女の子たちも年長の子に抱きかかえられて塀の上に顔を出している。皆笑っていた。笑っている……良かった。ポルメリアは顔をほころばせ手を振り返した。

子供たちの歓声が上がる。もう一度大きく手を振った彼女は、暖かな気持ちに包まれて道を急いだ。

大丈夫。私は変わる。変わらなければ。あの子たちが生きていく、この世界の為にも。

夜明けと同時に開かれた門は、ケルマディク市内に入る人や物でごった返していた。

その中で新しい四人の仲間がポルメリアを待っていた。

「お待ちせしました。さあ、参りましょうか」

いつも一人だった彼女がこんな事を言うのは初めてだ。それだけでも何かが変わる気がする。そんな期待と不安が入り混じっていた。

リュイシスは無愛想だった。クレドネエとドウルワイトは仕方ないと顔を見合わせて肩をすくめる。そしてイリネアは揃った仲間に言った。

「次の獲物は地下迷宮の黒竜よ。依頼主は、ディスレン侯。久々の大仕事だから気合い入れていくよ」

それぞれがそれぞれに返事をする。朝日が昇る雑踏の中、五人の仲間は旅立っていった。

竜を殺す旅路に。